

基礎力をつけるための英語指導

～わかる授業の実践～

大阪府南河内郡太子町立上宮太子中学校

たつみ しゅんじ
巽 俊二

【実践の内容】

「学力の低下」は「学習意欲の低下」に起因している。そして、学習意欲の低下の原因になっているものは、基礎力の不足、体力の不足、気力の不足である。不足している基礎力、体力、気力のうち、基礎力を身につけさせることによって、体力及び気力をも向上させることが可能であると考えた。

本実践では、主たる教材である教科書をいかに使いこなすかをテーマにしたが、一定の期間に集中的に行ったものではない。毎日の英語の授業の指導法を具体的にどう改善したかを示したものである。基礎力の定着は、毎日の授業の有効な方法を継続していくことによって可能になると考えたからである。

【論文の紹介】

1 4領域の指導順序

1時間の授業には指導目標を設定するが、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4領域を対等に指導するのか、あるいはそのうちの一部の領域に重点を置くのか、また、言語材料と題材内容のどちらを中心に指導するのか、などの目標によって4領域の導入の順序は異なってくる。しかし、そのような特別な目標をもって指導する場合を除いて、年間を通じて、次のような順序で4領域を導入していった。

「聞く」, 「話す」
→ 「読む」 → 「書く」

2 帰納法による指導

題材内容を理解させるために、(ア)主題を提示し、(イ)概要・要点を考えさせ、(ウ)単語や語句、及び文法・文型の意味を推測させるという方法をとった。いわゆるトップ・ダウン方式である。

文法事項については、初めにその定義を教え込むのではなく、様々な例を多く示し、そこから共通点・相違点などを発見できるかを問うた。教え込まれると、生徒の活動は理解し記憶することが中心になるが、帰納法によれば、類推したり思考したりする活動が活性化することになった。

3 言語の使用場面

英語の学習においては「まず文法ありき」ではない。語るべき内容を持ち、コミュニケーションを図ることこそ第一の目標である。したがって、実際に英語を使用しながら、英語が使われている場面を把握させるように努めた。文法事項を導入するときでさえ、自然な場面を設定するようにした。

4 スローラーナーへの配慮と低学力への対策

勉強の仕方がわからないという生徒に対して、次のような方法を試みた。

- (1) テスト問題(単語・熟語)を事前に配布して、あらかじめ覚えるように伝え、同一問題をテストした。
- (2) イニシャル・センテンスを考案し、英文を覚えやすくした。
- (3) 学習した内容は、必ずコミュニケーションする時間をもって体験させた。
- (4) 「聞く」能力についても評価した。
- (5) コミュニケーション能力の評価については加点法を用いた。

5 おわりに

学力とは、蓄積された知識の集大成というより、「学ぼうとする力」であると考えた。生徒たちの目の輝きと学習意欲の向上は、後者の学力がついてきたことを証明するものであった。